

新しいジェンダー・アイデンティティ理論の構築に向けて —生物・医学とジェンダー学の課題— 中村美亜

近年の性同一性障害や性差に関する生物・医学的研究は、人間が生まれながらに「男らしさ」や「女らしさ」を身につけていることを裏づけているのだろうか¹。『ブレンダと呼ばれた少年』は、ジェンダー・アイデンティティ（自分が男である、あるいは女であるといった自己認識、しばしば「性自認」と訳される）が、生物学的に宿命づけられていることを証言しているのだろうか〔コラピント、2005〕²。こうした議論は、2006年7月におこなわれたシンポジウム「身体・性差・ジェンダー：生物学とジェンダー学の対話」においても焦点の一つとなったが、ジェンダー・アイデンティティの議論は、生物・医学とジェンダー学の立場が、原因論をめぐって先天的か後天的か、さらには研究姿勢について科学的か政治的かというような対立を示すようになってしまい、実りのある対話には至らなかった³。

たしかに生物学や医学の実証的な研究成果は、人文系の学術的成果にくらべて、より“客観的”で“科学的”に見えるかもしれない。しかし、本論が明らかにするように、ジェンダー・アイデンティティ概念の誕生や実体化のプロセスに関して言えば、生物・医学的研究においても、研究の前提やデータの解釈において、研究者をとりまくイデオロギーや研究者自身の価値観が反映されているのは否定し難い事実であり、生物学や医学の方がジェンダー学（本論では、人文社会科学系の諸分野でジェンダーを扱う研究の総称語として用いる）よりも“科学的”で“正しい”とは言い切れない。その一方、近年のジェンダー学において、ジェンダー概念が、当初提起された意味を離れ、もっぱら構築主義的に使用されているという状況が、生物学・医学を専門とする人との対話を困難にしているのも事実である〔日本学術会議、2006a: 62-64〕⁴。

しかし、ジェンダー・アイデンティティに関する生物・医学とジェンダー学にしばしば見られる齟齬は、ジェンダー・アイデンティティという実体についての理解が二分されているというよりは、むしろジェンダー・アイデンティティとは何かという共通認識が欠けていることから生じているものと考えられる。そして、なぜ共通理解がないかといえば、それは、この概念そのものに矛盾が内包されており、機能不全を起こしているにもかかわらず、そのことが明解に指摘されることなく使用され続けているからである。

そこで本論は、ジェンダー・アイデンティティという概念が、生物・医学においてどのように捉えられてきたかを批判的に振り返ることを通じて、ジェンダー・アイデンティティとは何かを問いなおす。そして、生物・医学とジェンダー学が、現在取り組まなければならない課題は何かということを、従来とは異なった観点から提示する。

本論は、決して革新的なことを主張しようとするのではない。しかしながら、ジェンダー・アイデンティティ概念の拠り所となった理論モデルの検討や、性の多様な現実を考慮し直すことで、現在「生物学・医学 vs ジェンダー学」あるいは「科学 vs 政治」と図式化され、必要以上に先鋭化されてしまったジェンダー・アイデンティティ論争を対話へと、さらには新たな課題への協調的取り組みへと導くことができれば幸いと考えている。

ジェンダー・アイデンティティの一般的理解

次節以降における議論の混乱を避けるために、まず生物・医学とジェンダー学において、ジェンダー・アイデンティティがどのように理解されているのかを確認しておきたい。「ジェンダー・アイデンティティとは何か？」という問いに対する、もっとも素朴かつ真摯な答えは、「自分のことを男と思っているのか、女と思っているのかということ」であろう。性同一性障害のコンテキストでは、人には「体の性別」と「心の性別」があり、ジェンダー・アイデンティティは「心の性別」を指すという言い方もされる。しかし、「心の性別」とは何かというと、それはまったく曖昧なままである⁵。

ここでは、ジェンダー・アイデンティティの生物・医学に関する一般的理解を知る一つの方法として『ジェンダーがわかる』を見てみたい。2002年に朝日新聞社から出版されたこの本では、40人を超える各分野の専門家が、それぞれの立場からジェンダーに関わる問題をわかりやすく解説している⁶。ジェンダー・アイデンティティについての記述は、主に「多様化する性を生きる」と「性差を科学する」という章で見られる。ここでは、生物・医学の専門家によって書かれた3つの文章に着目したい。

精神科医の山内俊雄は「性同一性障害とはなにか」で、セックスとジェンダーを次のように説明している。

つまり、性には生物学的な性別（sex）としての雌雄の区別のほかに、自分が「男（女）である」あるいは「男（女）らしい」と感じる性の自己意識、あるいは自己認知ジェンダー（gender）と呼ばれるものがあるということです。[アエラムック、2002：118-119]

ここでは、生物学的な性別をセックスと、性に関する「自己意識、あるいは自己認知」をジェンダーと定義している。これは、明らかに「自然的・生物学的性差」をセックス、「社会的・文化的性差」をジェンダーとする、現在日本のジェンダー学でもっとも広く使われている定義と異なる[同：4]⁷。性の「自己意識、あるいは自己認知」をジェンダーとする用法は、「社会的・文化的性差」という定義が生まれる以前、20世紀半ばインターセックスに関する研究に見ら

れたものである [Stoller, 1968； Money, 1995: 18-19； Goldner, 1991； ハラウェイ、2000：241-283]。ただし、性に関する「自己意識、あるいは自己認知」は、次の節で見ると、1960年代半ば以降「ジェンダー」ではなく「ジェンダー・アイデンティティ」と呼ばれるのが一般的になった⁸。

山内は「自分が「男（女）である」あるいは「男（女）らしい」と感じる性の自己意識、あるいは自己認知」をジェンダーとしたが、その直後で、一般に考えられている「男らしさ」「女らしさ」は本当に存在するのかと疑問を投げかける。「静か、優しい、おとなしい」であれば女、「荒々しいとか、無骨、攻撃的」であれば男という決めつけはできないだろうと山内は言う [アエラムック、2002：121]。では、もしそういう決めつけができないのだとしたら、「男（女）らしい」と感じる自己意識は何をもとになされるのだろうか。生物学的にはどのように決定されるのだろうか。こうした疑問に答えるべく、山内は続けて性同一性障害の原因について、「性ホルモンによって脳の働きが規定された結果として、身体的・精神的性差が生じることが知られて」いる一方、「らしさ」の形成には環境因子や心理因子も関係して」と記している [同：121]。

脳の専門家、新井康允は、「男と女の脳の違い」で脳における性差について解説しているが、その一例として、視床下部の分界条床核の大きさに関する研究を紹介し、ジェンダー・アイデンティティに言及している。

図2Bの [引用略] 分界条床核 (BNST) [sic.] にも男女差が認められ、男性のほうが大きく、女性のほうが小さいのですが、男性から女性への性転換者 (MtF) では女性と同じく小さく、逆に、女性から男性への性転換者 (FtM) では BNST の大きさは男性のものに近いということが、最近報告されました⁹。

しかし、同性愛男性の BNST は、異性愛男性とは差が認められていません。このことから、BNST は性的指向とは関係なく、ジェンダー・アイデンティティとかなり特異的に関係がある可能性がでてきました。[同：134]

ただし、新井はここでジェンダー・アイデンティティが何かについては全く語っていない。しかし、より問題と思われるのは、(おそらく編集部がつけたであろう) 見出し、「脳の違いがジェンダー・アイデンティティの形成過程にかかわる」である。新井の文では、「関係がある可能性がでてきた」であったのに、タイトルでは「かかわる」となっており、因果関係が断定された格好になっている。

免疫学、性科学を専門とする宇野賀津子は、「遺伝子から性の決定を考える」で遺伝子によって性分化がおこる過程を説明している。外性器に関する性分化について解説を終えたあと、「心の性」について語られる。

このようにいくつかのステップを経て身体の状態は男あるいは女に決まりますが、まだすべては決まったというわけではありません。

「男の心、女の心、母親の体内で決まる心の性」

以前はヒトは心の性は白紙で生まれ、その後、男あるいは女の心をもつようになると考える人が多かったのですが、最近の研究では、ヒトにおいては胎児の段階で心の性もかなりの部分が決まっていると考えられるようになりました。[同：141]

宇野は「心の性」が何であるのか説明はしていない（「ジェンダー・アイデンティティ」をわかりやすく言い換えたものと思われる）が、それは胎児の段階で「かなりの部分」決定されると述べている。引用部分の続きでは、遺伝子の性と外性器が一致しない例をあげながら、性の確定は慎重でなければならないとして論を終えている。

以上、生物・医学の専門家の発言についてまとめるならば、次のようになるだろう。山内は、ジェンダー・アイデンティティ（引用文では「ジェンダー」）を、「自分が「男（女）である」あるいは「男（女）らしい」と感じる性の自己意識、あるいは自己認知」とし、その原因については、生物学的要因も心理的・環境要因の両方が考えられるとした。新井は、ジェンダー・アイデンティティが何かについては明らかにしていないが、BSTc（引用文では「BNST」）とジェンダー・アイデンティティに関係がある可能性がでてきたとした。しかし、見出しは「関係がある」とすでにそれは判明したかのような書き方になっている。宇野は、ヒトは胎児の段階でジェンダー・アイデンティティ（引用文では「心の性」）もかなりの部分が決まると発言した。

このようにみると、新井と宇野にとっては、ジェンダー・アイデンティティは生物学的に自明なものであるかのような印象を受ける。一方、山内は、ジェンダー・アイデンティティを明確に定義し実体化しているようにみえる反面、「らしさ」の尺度について疑問を呈し、生物学的性差の問題だけでは語りえないというニュアンスをほのかに漂わせている。しかしながら、この三人の記述に明らかなのは、近年のジェンダー学研究者の多くが「常識」としている、ジェンダーは、文化的・社会的・歴史的に構築されたものであるという認識が見られないことである。

これに対し、構築主義的立場を強く押し出すジェンダー学研究者のイメージするジェンダー・アイデンティティは、随分違ったものである。『ジェンダーがわかる』では、加藤秀一が構築主義的な見方を次のように説明している。

この意味での構築主義的の潮流を押し進めたM・フーコーは、文化（言説）に先立つかのように見えるセックス（自然・本能としての性）というものは、実は言説の網の内部に、事後的にかたちづくられた観念にすぎないと言いました（『性の歴史』）。さらに、J・バトラーは、「異性愛者である男女」を正常な人間像として構築する言説のシステムを、高次の意味における〈ジェンダー〉としてとらえなおしています（『ジェンダー・トラブル』）。こうして、性をめぐる常識の基盤である「性欲」や「性別」さえもが、実在そのものではなく、歴史的・社会的に構築された観念的カテゴリーとして分析されることになったのです。[同：11-12]

「性別」も歴史・社会的に構築されるものとする、こうした構築主義的な立場では、ジェンダー・アイデンティティも、当然、歴史・社会的な次元に属するものであると見なされ、観念的なカテゴリーとして論じられる。特にバトラーの『ジェンダー・トラブル』における、ジェンダーはパフォーマンスであるという考え方は、ジェンダー学に新しいパラダイムを打ち立てたが、その先鋭的な理論は、わが国では戦略的に用いられることも多く、ジェンダー学を専門としない人には、誤解を受けることがしばしばある [日本学術会議、2006a: 62]¹⁰。

言い換えるならば、生物・医学研究者は、性差のレベルがどこで現れるにせよ、人間は男女の二つに分けることができるということが大前提に話をする傾向にあるのに対し、ジェンダー学研究者の中には、ジェンダーの生物学的な差異からの独立性を堅持するあまり、生物学的な次元の話回避してしまう傾向がある¹¹。それでは、そもそもジェンダー・アイデンティティとは何だと考えられていたのだろうか。

ジェンダー・アイデンティティ概念の誕生と実体化

この節では、ジェンダー・アイデンティティという概念が誕生した時、それがどのようなものと考えられていたか、またその概念がどのように実体化されたかを考察する。

20世紀半ばから後半にかけて、ジェンダー・アイデンティティ概念の誕生と普及に貢献したのは、インターセックスの研究に携わっていたロバート・ストラーとジョン・マネーである [Goldner, 1991; Bullough & Bullough, 1993; Money 1995; ハラウェイ、2000; 高橋、2003]。アメリカ西海岸のカリフォルニア大学ロサンゼルス校で精神科の教授をつとめてい

たストラーは、1963年の国際精神分析学会でジェンダー・アイデンティティに関する発表をおこなったが、その内容は、翌年の学会誌に掲載されている。

ストラーは「ジェンダー・アイデンティティとは、自分がどの性別に属すると思っているかという感覚、すなわち、「私は男だ」あるいは「私は女だ」という認識である」と定義した [Stoller, 1964: 220]。それまでは、特定の性別に属するという自己イメージを明確に表す概念はなかったため、外性器では男女の性別がはっきりしない場合、その人が男である、あるいは女であるということが困難であった。しかし、ジェンダー・アイデンティティという概念を用いると、外性器の形状がどうであろうと、その本人が男だという自己イメージをもってれば、男と言うことができるようになる。インターセックスの研究者にとって、この概念は汎用性のある重要なものだった。

ストラーはこの論文で、ジェンダー・アイデンティティが次の3つの要因によって生じるのではないかと考えた。(1) 外性器の外観、またそれが受ける刺激といった解剖学的・生理学的なもの、(2) 親や兄弟、仲間の態度が及ぼす影響（男の子とみなして接するか、女の子とみなして接するか）、(3) 生物学的作用 biological force（当人の意識が及ばないところで生ずる駆動エネルギー drive energy）。最初の二点は、それ以前にも言及されることが多かったが、最後の生物学的作用の可能性については、ほとんど論じられることがなかった。ストラーは症例を二つ紹介することで、この新しいアプローチへの注意を喚起した。もちろん、ここではその生物学的作用が何であるかが明らかにされたわけではないが、ストラーは必ず何らかの作用があるはずだと強く主張した。

これに対し、同時期、東海岸のジョン・ホプキンス大学でインターセックスの研究を勢力的におこなっていた心理学者のジョン・マネーは、ストラーとは異なり、ジェンダー・アイデンティティはもっぱら生育環境によって決まると考えた。1973年時点でのマネーの定義は次のようである。

程度に差はあるが、一人の人間が男、女、あるいは曖昧なものとしてもっている個性の統一性、一貫性、持続性。それは特に自己意識や振る舞いにおいて表現される。ジェンダー・アイデンティティはジェンダー・ロール（性役割）の私的体験であり、ジェンダー・ロールは、ジェンダー・アイデンティティの公的表現である。 [Money, 1996: 4]

このようにジェンダー・アイデンティティを、ジェンダー・ロールの内的投影であると考えるのがマネーの特徴である¹²。こうした生育環境重視の考え方、つまり、ジェンダー・アイデンティティは生まれた時点では決まっておらず、その後の育て方次第で決まるという説は、当時、

大きな脚光を浴びた。この様子については、『ブレンダと呼ばれた少年』にも詳しく書かれている [コラピント、2005]。

マネー理論に「待った」をかけたのが、有名なミルトン・ダイヤモンドの「人間の性行動の発生についての批判的評価」という論文である [Diamond, 1965]。この論文では、上述のマネー、及びマネーの同僚であるハンブソンらの理論に対して、さまざまな角度から緻密に検証がおこなわれ、マネーらの理論は批判にさらされる。ダイヤモンドは、最後の要約の部分で次のように述べている。

これまで述べてきた証拠や議論を通じて、人間は、誕生前の遺伝子やホルモンによる影響から、生まれる前に男か女になるという指向性を有しているのは明らかである。個人の性行動、したがって性役割は、生まれた時点で中立で、どちらにも傾いていないということはないのである。にもかかわらず、生まれる前の性別傾向はあるパターンへの限界を定める潜在的可能性に過ぎず、そのパターンは個体発生的体験 [訳注：つまり「生育において」] 大きく修正されうるものではある。(中略) 人間の性行動は先天的要因と後天的要因が混ぜ合わさった結果なのである。 [同：167]

このようにダイヤモンドは、ジェンダー・アイデンティティは生まれてから決定されるとするマネーの説を批判した¹³。

こうして、マネー理論の社会的注目度とは別に、生物・医学の分野ではストラーの提示したジェンダー・アイデンティティの決定要因を求めて、さまざまな研究が繰り広げられることになる。近年有力とされているのは、胎児期でのホルモンの影響であり、また、研究の妥当性ともかく、注目を浴びたのは、脳の分界条床核における差異である [Devor, 1997: 62]。

この脳の研究を推進してきたオランダのD. F. シュワブが、2004年に「人間の脳における性差：ジェンダー・アイデンティティ、トランスセクシュアリズム、性的指向との関連」という論文を発表し、これまでおこなわれてきた生物学的研究のレビューをおこなっている [Swaab, 2004]。そこでは、染色体異常（クラインフェルター症候群を含む）、ステロイド合成因子、双子、遺伝的刷り込み、ホルモン、インターセックスなどの実にさまざまな先行研究が紹介され、ジェンダー・アイデンティティや性指向との関連が論じられている。シュワブは、ここでの考察を次のようにまとめている。

遺伝的あるいは他の障害を通して人間を観察するならば、胎児の脳の発達に直接作用するテストステロンが、ジェンダー・アイデンティティや性指向の発達にもっとも重

要なのは明らかである。生まれた後の社会的要因が深く関与することについての信頼できる証拠はない。人間の脳においては、ジェンダー・アイデンティティや性指向に関連すると思われる構造的差異があると報告されている。[同：301]

ここでは次の二つのことに注目したい。一つ目は、シュワブが「ジェンダー・アイデンティティや性指向の発達にもっとも重要」であるとか「ジェンダー・アイデンティティや性指向に関連すると思われる構造的差異」という言い方をしており、あくまで関与の重要性あるいは可能性を示しているのであり、「決定要因となりうる」とは記していないことである¹⁴。これは、ジェンダー・アイデンティティを体験の問題とするシュワブの定義とも関連があると思われるが、これについては後で詳しく述べる。

もう一つは、社会的要因について、「信頼できる証拠がない」と断定している点であるが、実際には、マネーの「ジョン／ジョアン症例」（日本では「ブレンダ症例」として知られている）が触られている程度であり、これは明らかに問題と思われる。近年、社会的要因のみによってジェンダー・アイデンティティが決まるという極端な説を唱える人はいなくなったが、ジェンダー・アイデンティティの形成に社会的なさまざまな要因が絡むということは、さまざまな研究や臨床例から明らかになっており、それに言及しないで、社会的要因の重要性を示す研究がないと発言するのは、シュワブにバイアスがかかっていると一言ざるを得ない¹⁵。

シュワブが述べているように、ジェンダー・アイデンティティをめぐる生物学的研究は、半世紀にわたり数多く行われてきた。これらの一連の研究を見ていると、ジェンダー・アイデンティティという実体はあたかもどこかに存在しているかのようでもある。しかし、ストラーがジェンダー・アイデンティティという概念を提案したとき、そこに生物学的作用があったのは、あくまで仮説であり、その概念の正当性は「駆動的エネルギー」が明らかになった時にのみ証明されるはずであった。ところが、ジェンダー・アイデンティティ概念は、「駆動的エネルギー」の正体が何か明らかになる前に、繰り返し「そういうものがあるはずだ」と語られることによって（実際には、語られ継がれる過程で「はずだ」が抜け落ち「そういうものがある」となることも多い）、その正当性を帯びてきたと言える。ジュディス・バトラーの言い方をまねるなら、引用され続けられることによって、権威が担保され、実体化されてきたといえる [Butler, 1993]。

そして、この実体化のプロセスに、トランスセクシュアルの政治的発言が大きく関わっていることは、すでに多くの人たちによって指摘された通りである [カリフィア、2005]。要点だけ述べるならば、トランスセクシュアルは、「人には生まれながらにジェンダー・アイデンティティというものがあり、それはどのような方法によっても変わることはない」と言い続けるこ

とによって、主張の正当性を確保し、医療や法の整備を促してきた。生物学的要因を主張し、ジェンダー・アイデンティティの決定は不可逆であることを主張することが、社会の認知を促進させるために有効な手段であったことは事実である¹⁶。しかし、ジェンダー・アイデンティティが概念モデルとして適切であるかということは、半世紀たった今、改めて検証される必要があるだろう。

ジェンダー・アイデンティティ概念の前提

ストラーによると、ジェンダー・アイデンティティは、どの性別に属するかという自己の感覚であり認識である。そうした感覚や認識が、外性器の存在によって、また周囲の人からの扱いによって形成されるというのは、誰もが容易に想像できることだろう。これは、言い換えれば、自分はどっちの仲間か、つまり、男の集団に属するのか、女の集団に属するかということである。この意味でのジェンダー・アイデンティティは、男・女という二つの選択肢が社会にあると想定し、どっちの集団に帰属するかを表明するということである。

しかし、そうした感覚や認識が、生物学的作用によって左右されるというのは、どういふことなのだろうか。本人の意識が及ばないところで生ずる「駆動エネルギー」はどのように男／女に属するという感覚や意識を持たせることができるのだろうか。言い換えれば、何によって男／女が判定されるのか、男／女の参照点はどこかという問題である。

確認するが、ジェンダー・アイデンティティは、外性器の形状とは独立したものである。性科学では、性別分けを可能にするものとして、一般に、染色体、性腺、ホルモン、内性器、外性器が挙げられる。インターセックスをはじめとする研究を通じて、こうした5つのレベルで個々に判定された性別は必ずしも一致しないことがわかっており、そうした方法では性別が判定されないためにジェンダー・アイデンティティという概念が提案されたのだ。

そうであるならば、ストラーのいう「駆動エネルギー」は、概念的には、染色体、性腺、ホルモン、内性器、外性器よりも高次に位置するもので、これらの個々のレベルの性別の一致不一致にかかわらず、それらを超えて性別を決定するものと想定されているということになる。つまり、ジェンダー・アイデンティティ概念には、人間には生物学的に決定される男と女があり、一元的な統括システムの中で、必ずどちらかに振り分けられる、そして、それは科学者によって客観的に測定されうるという前提があったのである¹⁷。言い換えるならば、ジェンダー・アイデンティティ概念は、男女二元論、異性愛主義、単体 (monolithic) システム、科学万能主義、普遍性への信頼といった西洋の近代的イデオロギーと、その中で形成された研究者の価値観によって生み出された産物なのだった。

先の2004年論文で、シュワブはジェンダー・アイデンティティを「男性的なものに帰属しているか、女性的なものに帰属しているかという観点から表現される、アイデンティティに関する体験であり、性別に関する解剖学的実体から独立したものである」と定義した〔同：303〕。この定義は、半世紀前のストラーのものとは次の二つの点で異なっている。

一つめは、ジェンダー・アイデンティティは「感覚」「認識」の問題ではなく、「アイデンティティに関する体験」に変わったことである。感覚・認識は、自己内部での即時的なあるいは時間性を問題にしない認知の問題であるのに対し、アイデンティティに関する体験というのは、過去の社会体験を振り返ることによって把握されるもの、あるいはそこでの社会体験を通じて形成された意識のことを指す。言い換えれば、前者が自己内部完結的で超時間的な概念であるのに対し、後者は社会的・歴史的概念である。

二つめは、「どの性に属するか」といったことが、「男性的なもの、あるいは女性的なものへの帰属性」となったことである。ストラーの時には自明と思われた「男であること」「女であること」が、実は定義不能であることが明らかになったからであろう。シュワブは「男性的なもの」「女性的なもの」への「帰属」と言い換えている。しかし、こう言い換えたからといって問題が解決したわけではない。「男性的」「女性的」というのは、何によって決まるのかということとは不明のままである。シュワブは、ジェンダー・アイデンティティは「性別に関する解剖学的実体から独立したものとわざわざ断っている。私たちの社会通念としての「男性的」「女性的」ではないとするのなら、やはり、ストラーが描いたような男女を究極的に二分する生物学的因子がどこかに存在していることを期待しているとしか考えられない。

このように検討してみると、シュワブのジェンダー・アイデンティティ概念が内包している矛盾が明らかになってくる。つまり、それは社会的・歴史的に形成されるものであると言いつつながら、男女の二項に分類する一元的統括システムによって決定づけられる生物学的次元の話であると言う点である。これは明らかに矛盾だが、この矛盾にどう向き合うかということが、実はジェンダー・アイデンティティを考える上でとても重要なポイントとなる。これについては、最後の節で論じる。

ジェンダー・アイデンティティ概念の限界

ジェンダー・アイデンティティ概念が提唱された時、たとえインターセックスといえども、医者によって男女のどちらかに判定される客観的な基準がどこかにあるはずだという期待があった¹⁸。しかし、近年のインターセックスに関するさまざまな研究によって、性のあり方は、生物学的なレベルでも、また社会的なレベルでも、以前想定されていた以上に多様であることが認知されてきた。人間は単純に男女に二分され得ないのである〔Fausto-Sterling, 2000〕。

こうした状況の中で、医者ではなく、インターセックスである本人が、自分の性別を決めていくということも行われるようになってきた〔Dreger, 1999；ドレガー、2004〕。この場合、ジェンダー・アイデンティティは、あくまで当事者が自己決定するものであり、生物学者や医者といった他者から判定されるものではない。

また、20世紀後半、トランスセクシュアルと深く関わる専門家の間で、あるいは、自己を冷静にみつめるトランスセクシュアルの間で、ジェンダー・アイデンティティに対する見方が徐々に変化してきた〔中村、2005：14-40；金井、2006：248-249〕。例えば、1960年頃には信じられていた「真性トランスセクシュアル」は、実際には、非常に稀にしか存在しないということがわかった¹⁹。「真性トランスセクシュアル」を自認していた人たちは、実は、医療行為を受けるために、医療者に認めてもらいやすい話をしてきたことが明らかになってきたからである。また、そうした作がないにしても、人間の過去の体験についての語り、「客観的」でありえないことは理解されるようになってきた。なぜなら語りという行為そのものが、過去におきたことについて一つの解釈を提示する場にすぎないからである〔Riessman, 1993；片桐、2003〕²⁰。さらに、「誰もが自分は男である女であるというジェンダー・アイデンティティを持っている」という前提や、「ジェンダー・アイデンティティは一度定まると変化しない」という前提条件も、最近では問題視されるようになってきた〔中村、2005〕。

ストラーによるジェンダー・アイデンティティ概念の提唱によって、性差に関するさまざまな生物学的研究がおこなわれ、人間の体に関する新たな発見が数多く報告された。また、トランスセクシュアルの医療制度や法制度の獲得や、一連の人権運動も、この概念に追うところが多かった。男女の究極的な二分を目的にしたこの概念は、半世紀にわたり、それなりの有用性を保っていたのは確かである。しかし、人間の性の実態が、以前に考えられていたよりもはるかに複雑で多様であることが明らかになった現在、つまり、性に関するデフォルトが誤っていたことが明らかになった現在、この概念のもつ理論的モデルをあらためて検討し直す必要があるのではないだろうか。

今日的視点から見たジェンダー・アイデンティティ

ここで、改めて今日的視点から見たジェンダー・アイデンティティとは何かを問い直してみたい。以下では、ジェンダーを“身体的差異とは独立した、男女といった性別に関する区分のプロセス、あるいはそのシステム”と定義する。これは、身体に関する性差や男女の区別がすでに存在している現在において、にもかかわらず、伝統的な性別二元論や性役割、強制異性愛主義、近代的なアイデンティティ観、さらには「心 vs 体」というデカルトの二元論に縛ら

れずに、どのようなジェンダーに関するモデルを帰納的に示すことができるかという一つの試みである²¹。

また、アイデンティティに関しては、「自分自身はどういう人間であるかという自己認知」と定義する。社会学者のアンソニー・ギデンズは、「自己というものが、かなりとりとめのないものである以上」、自己のアイデンティティというの、「哲学者が事物のアイデンティティを語るのと同じように、長期にわたり変化しないものを指すというわけにはいかない」と言っている [Giddens, 1991, p. 52]。自己というのが総称的な概念であるのに対し、自己のアイデンティティというのは、「個人が“自意識”という観点から意識するものである」[同：52]。したがって、自己のアイデンティティは、「個人の行動様式における継続性のあるものとして与えられるのではなく、個人がふだん反動的に行っている活動において、日常的に創造され維持されているものである」と考えられるのである [同：52]。

それでは、自分が男というカテゴリーに属するか、女というカテゴリーに属するかというアイデンティティは、どのように形成されていくか。まず、最初に考えられるのが、身体の形状や発育に関することであろう。外性器がどのような形をしているかという視覚的なことから、胎児期や第二次成長期に脳がどんな作用を受けるか、また体がどのような特徴を帯びるかということまで含まれる。こうした身体におけるさまざまな要素が、ジェンダー・アイデンティティ形成にとっての重要な契機になるだろう。当然、この時点で、自分がどのようなタイプの身体的特徴あるいは指向性をもつかということは自覚されるのであり、それによって、自分自身と似た人たちとの仲間意識、そして、その人たちのいるグループに帰属意識をもつようになるだろう。

しかし、帰属意識がどのように形成されるかということ振り返ってみるならば、そうした体験が単に何かとの類似関係によって成り立つものではないということも明らかである。人間の体験というのは非常に主観的なものであり、同じことを体験したとしても、それをどう感じるか、どう考えるか、どのように身体が反応するのかは、人によってまちまちである。どういった対象に対して自分とのアイデンティティを見いだすのか、これは極めて個人的で複雑な思考プロセスである。

加えて、アイデンティティに関する体験は、ある時期に決定され、固定化されるものではない。常に更新が繰り返されている。もちろん、更新の結果、以前からもっていたアイデンティティの意識がより強固になることもあるだろう。この場合は、「結果として」アイデンティティが不変なケースと言うことができる。しかし、逆に、更新の結果、以前からもっていたアイデンティティの意識に変化が見られるということもあるのは当然のことであろう。

ジェンダー・アイデンティティは本人が決定するものであるという観点に立ち、以上のことをふまえるならば、ジェンダー・アイデンティティは、次のようなものと言うことができる。

すなわち、身体のような特徴（外見的特徴だけでなく、胎児期での脳への作用や生理や妊娠などによる体験的特徴も含む）が、個々の文化・社会生活を通じて自己のアイデンティティ形成とどのように関わるかということについて得た、きわめて個人的で主観的な解釈であり、更新し続けられるプロセスであると言うことができるだろう。また、このプロセスは、身体からアイデンティティ形成へという一方向でのみ生じるのではなく、アイデンティティから身体的特徴（いわゆる後天的な性差）の形成へも作用する場合もあると考えられ、両方向に複雑に絡み合うものと見なすことができる。

ジェンダー・アイデンティティの新しい概念モデルへ向け

ここで参考となるのが、ダナ・ハラウェイが紹介している免疫調整理論に関する概念モデルの変遷である [ハラウェイ、2000]。ハラウェイは、ゴールブの『免疫学：ある統合』という教科書に載せられた4つの「免疫のオーケストラ」（免疫調整理論の異なった概念モデルをわかりやすくイラスト化したもの）について次のように論じている。1968年の最初の図では、

G・O・D（神様）がリンパ節の根元の指令位置に立って、T細胞とB細胞とマクロファージから編成されたオーケストラを指揮している。細胞たちは身体のあるところへと行進して行って、それぞれに定められたパートを演奏している。[同：395]

ところが、1977年の図になると、こうした一元的な統括システムは崩れていく。

指揮者はもはや一人ではなく、オーケストラはかなりミステリアスな三人のT細胞のサブセットに「リード」され、しかも彼らは全部で十二本の指揮棒—それぞれの指令を伝える細胞表面アイデンティティ・マーカ—を持っている。G・O・Dとはいえば、困惑もあらわに頭をかくばかりである。[同：400]

1982年の図では、「神」の存在はさらに背景に追いやられ、個々の細胞やプロンプターが解釈や決定を行うという多面的なモデルに変わっている。かくして、「生体のハーモニーを一人のマエストロがコントロールする」というモデルは、「無数の中心と周辺が入り乱れた、一種のポストモダン混成曲（パスティシュ）」へと変貌をとげるのである。

1960年代にストラーによって考案されたジェンダー・アイデンティティの概念モデルは、神のような「駆動エネルギー」が、身体の性別に関する要素を統括すると見なされていた点において、1968年の免疫調整理論に関する概念モデルと類似している。しかし、上述したように、

人間の性のあり方は、従来考えられていたよりもはるかに多様で、ダイナミックなものである。そうだとすれば、この概念モデルも、1982年の「免疫オーケストラ」に類似した多面的な意思決定・調和モデルによって置き換えられなければならないのではないだろうか。

もちろん、免疫のシステムと性の意識を司る脳のシステムを同列に比較することはできないだろう。しかし、「男女を二分するのだ」という命令を下す「神」的存在の有効性が否定された現在、そうした一元的統括システムによらないジェンダー・アイデンティティの新しい概念モデルを志向していかなくてはならないのは必然である。例えば、身体のさまざまな特徴（外見的特徴だけでなく生理や妊娠などの体験的特徴も含む）が、社会生活でのさまざまな体験と結びつきながらジェンダー・アイデンティティを形成していくものだとするならば、そうした心理・社会的体験を脳において形成する何らかの生物学的因子が、ジェンダー・アイデンティティを司る脳の部分にも作用を与えていると考える生物学的な研究も重要になってくるのではないだろうか。

むすび

最近の日本の状況を見ていると、ジェンダー・アイデンティティという実体はまるでどこかに存在しているかのようである。しかし、ストラーがジェンダー・アイデンティティという概念を提案したとき、そこに生物学的作用があったとしたのは、あくまで仮説であり、その概念の正当性は「駆動的エネルギー」が明らかになった時にのみ証明されるはずであった。ところが、ジェンダー・アイデンティティ概念は、「駆動的エネルギー」の正体が何か明らかになる前に、繰り返し「そういうものがあるはずだ」と語られることによって、その正当性を帯びてしまった。

しかし、人間は必ず男女に二分されるという前提に基づくジェンダー・アイデンティティ理論は、性の多様な現実についての理解が深まってきた現在、その有効性を失ってしまっている。ジェンダー・アイデンティティは、先に見た免疫システム同様、神のような存在によって一元的に統括されているものではない。むしろ、さまざまな要因が複雑に絡みあい、さまざまな部分でさまざまな決定がおこなわれ、その集積としてあるアイデンティティが形成され続ける。

今必要なのは、性を探求する各分野の研究者たちが、これまでに得てきた知見を互いに共有し合いながら、ジェンダー・アイデンティティの新しい概念モデル構築に向けて尽力することではないだろうか。シュワブの定義における矛盾が示唆したように、ジェンダー・アイデンティティは、個人の認知に関することでありながら、社会における体験によって形成されるものであり、また、時間的・歴史的な概念でありながらも、体内（特に脳内）物質的作用による

ものである。そうだとすれば、ジェンダー・アイデンティティ理論の構築は、生物・医学とジェンダー学が、それぞれのディシプリンがもつ本質的な違いを乗り越えて共同して取り組んでいかなければならない課題である。

もちろん、これは、生殖能力を基準に自然界のパラダイムを理解することでディシプリンが成立している生物学にとっては、受け入れ難いことであるかもしれない。また、自然科学が、今ある前提に基づき仮説を設定し、それが証明されるまで（あるいは、反証されるまで）実験を積み上げていくことで成果をあげてきたのだとすれば、これまで通り、ストラーやシュワブの延長上で実験を繰り返せばいいということになる。しかし、こうした生物学の前提や、その前提に基づいた実験結果を繰り返し公表することは、ジェンダー・アイデンティティの先天性や二元性、さらには伝統的性役割の妥当性を、社会において実体化していく効果がある。そしてそれによって、辛い思いを強いられる人たちが、インターセックスやトランスジェンダーに限らず、数多く存在しているのは事実である。こうした事実を鑑みるならば、今日、仮説の妥当性が疑われているにもかかわらず、その仮説に固執して研究を続けていくのには問題があるのではないだろうか。

一方、医学あるいは心理学からは、こうした新しいジェンダー・アイデンティティの考え方が、医療的処置や心理的ケアにどのような影響を及ぼすかと問われるかもしれない。この質問に十分に答えることは、本論の射程を超えることであるが、新しいジェンダー・アイデンティティ・モデルにもとづく医療やケアによって、インターセックスや性同一性障害の人たちに対するより適切な対処ができるようになるのは確かだろう。また、新しいモデルは、これまで社会にあまり注目されてこなかった人たち、厳密な意味での性同一性障害ではないが性別違和感に苦しんでいる人たち、あるいは、性役割をめぐる社会的プレッシャーに悩んでいる多くの人たちへのケアも充実させることを可能にするのではないだろうか。さらに、この新しい理論モデルは、旧来の性同一性障害診断基準や、ジェンダー・アイデンティティ尺度（BSRI）などの医学的・心理学的尺度が、ステレオタイプ的な男女の規範を強固に再生産している現状にも一石を投じることになるだろう。それは、結果的に、自分の与えられた性別や性役割に苦しんでいる人たちの心理的ストレスを軽減することにつながるはずである。

“生物・医学とジェンダー学が手をつなぐ”という言い回しは、現時点では、夢物語にしか聞こえないかもしれない。たしかに、両者のパラダイムを接合するということは決して容易なことではない。しかし、インターセックスやトランスジェンダーの問題から、昨今のジェンダー・バッシングに至るまで、ジェンダー・アイデンティティに関して現実が抱える問題群は、これまでの二元論的思考（男 vs 女、心 vs 体、当事者 vs 他者、自然科学 vs 人文社会科学）では捉えられなくなってきている。「夢物語だから」と言って取りかからないのではなく、どうした

らその夢物語が現実化できるかということに創意工夫をもって対処していくことが、現在われわれに課せられた課題ではないだろうか。残念ながら、本論ではその具体的方策にまで立ち入って検討することができなかったが、そうした方策を検討するきっかけになることができたと思えば幸いである。

〔附記〕本論文の一部は、第26回日本性科学学会学術集会におけるシンポジウムで「ジェンダー・アイデンティティの実りある議論のために」として発表された(2006年11月19日仙台)。このシンポジウムでの発表機会を与えてくださった学会長の村口喜代さん、本論考の着想段階で助言をいただいた小山エミさん、沼崎一郎さん、草稿の問題点を指摘してくださった、医者であり音楽学研究者である平井真希子さん、最終段階で大変有益で貴重なコメントをしてくださった本誌査読委員のお二人、さらに、前著『心に性別はあるのか?』に対するフィードバックをくださった多くの方々に、この場を借りて感謝の意を表したい。また、本論考は、お茶の水女子大学での数度にわたる文献討論会への参加に負っている部分が大きい。お世話してくださっている竹村和子さんにもお礼を申し上げたい。

註

- ¹ 世間一般では、性同一性障害や性差に関する研究成果が、「男らしさ」や「女らしさ」の先天性を裏づけているという誤認がかなり流布しているようである。例えば、宮崎哲弥は「性同一性障害者の性自認は、出生時以降変更されることがない。その点では一般的な性自認のあり方と何ら違いはないのだ。」と『週刊文春』に書いている [宮崎哲弥, 2006]。
- ² この本をめぐるわが国での論争については、[小山, 2006]。また、ジェンダー化を促す文化システムを問題にした、パトラーの解釈も参照されたい [Butler 2001]。
- ³ 2006年7月8日、日本学術会議主催講演会(東京、日本学術会議講堂)。このシンポジウムの報告は [日本学術会議, 2006a] に掲載されている。
- ⁴ さらに、「ジェンダー・フリー」という和製英語をめぐる、さまざまに「ジェンダー」が定義されなおしていることも、状況をより複雑なものにしている [上野千鶴子他, 2006]。
- ⁵ 筆者は、前著で、そもそも心に性別はあるのかという問題を論じた [中村, 2005]。
- ⁶ 本論がここで考察の対象とするのが専門的な学術書ではないのは、一般的な理解はこうしたガイドブックにおいて広められていると考えるからであり、また、学者や知識人といえども、専門以外に関する知識は、こうした啓蒙書から得られることが多いと考えるからである。また、『ジェンダーがわかる』は、四年前に出版されたものであるが、本論が以下で論じる生物・医学的な研究については、その後大きな進展はないので、考察の対象として妥当であると判断した。
- ⁷ ただし、現在「ジェンダー」という言葉が意味するものは、実にさまざまである [江原, 2006]。
- ⁸ 日本の医学においては、1990年代半ばまで、ジェンダーは「性の自己意識」を意味する言

葉として使われ続けた。例えば、日本精神神経学会が1997年に発行した「性同一性障害に関する答申と提言」[性同一性障害に関する特別委員会, 1997]。

- ⁹ 分界条床核は、一般に「BSTc」と表記される。BNST (bed nucleus stria terminalis) は、日本語の「分界条床」に対応する。
- ¹⁰ 『ジェンダー・トラブル』における「構築主義」については、これまで数多くの批判がなされてきたが、最近日本で出版されたものとしては、[檜垣, 2006]。パトラー自身は、後の著作 ([Butler, 1993] など) において、身体との関係について思索を深め、より洗練されたロジックを用いるようになっている。
- ¹¹ 学術とジェンダー委員会の報告書では、両者の立場の違いは「経験科学的方法」と「知識批判的方法」という観点から説明されている [日本学術会議, 2006b: 31-34]。
- ¹² この理論は、マネーの後の著作 *Sexual Signatures* (1975) の翻訳によって日本でも広く受容された [マネー & タッカー, 1979]。
- ¹³ ただし、だからといってダイヤモンドがジェンダー・アイデンティティは、生まれる前に決まると言ったわけではないことには注意を払う必要がある。『ブレンダと呼ばれた少年』では、この論文においてダイヤモンドが、ジェンダー・アイデンティティの先天説を唱え、後天説を全面的に否定したかのような書き方がされているが、これは誤りである [コラピント, 2005: 62]。
- ¹⁴ シュワブは2002年の論文で、前節(新井の引用部分)で取り上げたBSTc(分解条床核)の男女差が、子供の頃には十分認められなかったという報告をおこなっている [Chung et al., 2002]。
- ¹⁵ 社会的要因の関与に関する研究は、例えば [Bullough & Elias, 1997] にいくつか紹介されている。
- ¹⁶ 同様な政治的アクティビズムは、同性愛の原因論をめぐるでも見られる [Garber, 2000: 268-283]。
- ¹⁷ 高橋さきのは、この点に関して次のような言い方で批判をおこなっている。「この概念体系は、(一) 強固な性的二型性を前提とした体系であったし、また、(二) sexを、それが何かをとりあえず棚上げしたまま温存し、genderを、sexとは異なるが、sexに対して相対的に決定される何ものかとして指定し、各種の状態を、sexとgenderの一致・不一致・距離として記述していくという、いってみれば、濃度の異なる二つのブラックボックス的実体を、互いに相対的な距離を持つものとして便宜的に指定するという、すこぶる機能主義的な方法論によって提出された概念体系でもあった。」 [高橋, 2003]
- ¹⁸ マネーは、『ブレンダと呼ばれた少年』に見られるように、ジェンダー・アイデンティティは養育によって変わりうるという説を唱え、実践したという面が強調されがちであるが、インターセックスの扱いにおいては、染色体の差異を軸とした判定基準を設定していた [Dreger, 1999: 11-12]。
- ¹⁹ 「真性トランスセクシュアル」というのは、(1) 誕生以来終始一貫して自分があてがわれた性別と反対の性別であると認識し、そのように振る舞う、(2) 異性装をすることにまったく性的興奮が伴わない、(3) 生まれた時にあてがわれた性別と反対の性の人に対して性的関心がまったくない、という条件を満たしたトランスセクシュアルのことである。

²⁰ ただし、「真性トランスセクシュアル」という言葉が使われなくなった一方、性別違和感を持っている人を「真性」的なものとそれ以外に分けるという試みは、primary/secondary transsexual や core/peripheral gender identity の区別となって、現在に至るまで継続しておこなわれているのは事実である。例えば [Bailey, 2003] では、autogynephilic/homosexual transsexual の差異化がはかられている。また、これらは医学や心理学の分野だけでなく、性同一性障害の当事者間でも、性同一性障害であることの「正統性」を巡ってつねに争われている議論である。

²¹ 「心 vs 体」というデカルト的二元論の批判に関しては、[Grosz, 1994] を参照。

参考文献

- アエラムック編 (2002) 『ジェンダーがわかる』東京：朝日新聞社。
 上野千鶴子他 (2006) 『バックラッシュ! : なぜジェンダーフリーは叩かれたのか?』東京：双風社。
 江原由美子 (2006) 「ジェンダー概念の有効性について」、若桑みどり他編『「ジェンダー」の危機を超える!』青弓社、37-60。
 金井淑子 (2006) 「トランスジェンダーからの攪乱的問いかけ、ジェンダー概念再考」、若桑みどり他編『「ジェンダー」の危機を超える』東京：青弓社、246-254。
 カリフィア、パトリック (2005) 『セックス・チェンジズ：トランスジェンダーの政治学』(石倉由他訳) 東京：作品社。
 片桐雅隆 (2003) 『過去と記憶の社会学：自己論からの展開』京都：世界思想社。
 小山エミ (2006) 『「ブレンダと呼ばれる少年」をめぐるバックラッシュ言説の迷走』、[上野千鶴子他、2006 : 284-309]。
 コラピント、ジョン (2005) 『ブレンダと呼ばれる少年』(村井智之訳) 東京：扶桑社。
 性同一性障害に関する特別委員会 (1997) 「性同一性障害に関する答申と提言」(<http://www.netlaputa.ne.jp/~eonw/source/guide.html>)。
 高橋さきの (2003) 「生命科学とジェンダー」『環』第 12 巻 (<http://homepage2.nifty.com/delphica/archives/sakino01.html>)。
 ドレガー、アリス・ドムラット (2004) 『私たちの仲間—結合双生児と多様な身体の未来』(針間克己訳) 東京：緑風出版。
 中村美亜 (2005) 『心に性別はあるのか? : 性同一性障害のよりよい理解とケアのために』東京：医療文化社。
 日本学術会議 (2006a) 『学術の動向』11月号 (<http://www.h4.dion.ne.jp/~jssf/text/doukousp/2006-11.html>)。
 日本学術会議 (2006b) 『提言：ジェンダー視点が拓く学術と社会の未来』(学術とジェンダー委員会対外報告) (<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-t29.pdf>)。
 ハラウェイ、ダナ (2000) 『猿と女とサイボーグ：自然の再発明』(高橋さきの訳) 東京：青土社。
 バトラー、ジュディス (1999) 『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(竹村和子訳) 東京：青土社。
 檜垣立哉 (2006) 「身体の何が構築されるのか：バトラー的構築主義への一考察」、『現代思想』10月臨時増刊号、108-115。
 マネー、ジョン&タッカー、パトリシア (1969) 『性の署名：問い直される男と女の意味』(朝山新一訳) 京都：人文書院。
 宮崎哲弥 (2006) 「男と女のあいだには：日常に溶け込みつつある性同一性障害」(ミヤザキ

学習帳 111)、『週刊文春』6月15日号、135。

- Bailey, J. M. (2003). *The Man Who Would Be Queen: The Science and Psychology of Gender Bending and Transsexualism*. Washington DC: Joseph Henry Press.
 Butler, J. (1993). *Bodies That Matter*. New York: Routledge.
 _____. (2001). "Doing justice to someone: Sex reassignment and allegories of transsexuality" . *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies*, 7 (4), 621-636. (Reprinted in: Butler, 2004; Stryker & Whittle, 2006.)
 _____. (2004). *Undoing Gender*. New York & London: Routledge.
 Bullough, B. & Bullough, V. (1993). *Cross Dressing, Sex, and Gender*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
 Bullough & Elias, J. (Eds.). (1997). *Gender Blending*. New York: Prometheus Books.
 Chung, W. C. J., De Vries, G. J., & Swaab, D. F. (2002). "Sexual Differentiation of the Bed Nucleus of the Stria Terminalis in Humans May Extend into Adulthood" . *Journal of Neuroscience*, 22(3), 1027-1033 (<http://www.jneurosci.org/cgi/reprint/22/3/1027.pdf>).
 Devor, H. (1997). *FTM: Female-to-male Transsexuals in Society*. Bloomington: Indiana University Press.
 Diamond, M. (1965). "A critical evaluation of the ontogeny of human sexual behavior" . *The Quarterly Review of Biology* 40, 147-175.
 Dreger, A. (Ed.) (1999). *Intersex in the Age of Ethics*. Hagerstown, MD: University Publishing Group.
 Fusto-Sterling, A. (2000). *Sexing the Body: Gender Politics and the Construction of Sexuality*. New York: Basic Books.
 Garber, M. (2000). *Bisexuality & The Eroticism of Everyday Life*. New York: Routledge. (Originally published in 1995.)
 Giddens, A. (1991). *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Stanford, CA: Stanford University Press. (邦訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社、2005。)
 Goldner, V. (1991). "Toward a critical relational theory of gender" . *Psychoanalytic Dialogues*, 1(3), 249-272.
 Grosz, E. (1994). *Volatile Bodies: Toward a Corporeal Feminism*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
 Money, J. (1995). *Gendermaps: Social Constructionism, Feminism, and Sexosophical History*. New York: The Continuum Publishing Company.
 Money, J. & Ehrhardt, A. A. (1996). *Man & Woman, Boy & Girl*. Northvale, NJ: Jason Aronson Inc.. (Originally published in 1972.)
 Riessman, C. K. (1993). *Narrative Analysis*. Newbury Park, CA: Sage Publications.
 Stoller, R. J. (1964). "A contribution to the study of gender identity" . *International Journal*

of *Psychoanalysis*, 45, 220-226.

- _____. (1968). "Biological substrates of sexual behavior". In *Sex and Gender: On the Development of Masculinity and Femininity*. New York: Science House, 3-16. (Reprinted in: Stryker & Whittle, 2006.)
- Stryker, S. & Whittle, S. (Ed.). (2006). *The Transgender Studies Reader*. New York: Routledge.
- Swaab, D. F. (2004). "Sexual differentiation of the human brain: Relevance for gender identity, transsexualism and sexual orientation". *Gynecological Endocrinology* 19, 301-312.

Creating a New Gender Identity Theory: Challenges for Biology/Medicine and Gender Studies Mia NAKAMURA

In recent years, with the official recognition of Gender Identity Disorder and the publication of John Colapinto's *As Nature Made Him* (2000, translated by T. Murai into Japanese as *Burenda to yobareta shōnen*), the concept of gender identity has come to be taken up in a number of academic fields. However, perspectives on the concept in the fields of biology/medicine and gender studies often conflict and there has been a lack of fruitful debate. Yet, this does not mean so much that the understanding toward the actual state of gender identity is divided but, rather, that there is a lack of common recognition as to what the concept actually is.

Thus, in this paper, I critically examine the traditional conception of gender identity in the fields of biology/medicine in light of a social constructionist gender perspective and thereby question the significance of the concept itself. I then re-evaluate the male-female binary model of gender identity that emerged half a century ago and argue that our challenge is to construct a new theory of gender identity that reflects the reality of gender diversity today. In order to tackle this problem, I emphasize the need for co-operation and collaboration between the fields of biology/medicine and gender studies.

